

# 虚偽と捏造のテキスト —『ユリシーズ』第16挿話を読む—

Text as Deception and Forgery: Reading the 16th Episode of James Joyce's *Ulysses*

田 村 章

Akira TAMURA

## 1. はじめに

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の『ユリシーズ』(*Ulysses*) 第16挿話、いわゆる「エウマイオス」(“Eumaeus”) のテキストは、ありとあらゆる種類の虚偽や捏造に満ち溢れている。『ユリシーズ』と平行関係にあるホメロス (Homer) の『オデュッセイア』(*Odyssey*) では、その第14巻で、主人公オデュッセウス (Odysseus) は年老いた乞食に変装して豚飼いのエウマイオスの小屋を訪ね、そこで長い作り話をするのであるが、ジョイスのテキストでもホメロスのものと同様に偽りや欺きが重要となっているのである。

ただし、『ユリシーズ』第16挿話で、変装して作り話をするのは、主人公の中年男レオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) ではない。その役割を担う中心人物は、マーフィー (Murphy) と自ら名のる船乗りで、おそらくは法螺話だとされる航海の冒険譚を自慢げに語る。挿話の舞台となるのは、ダブリンのリフィ川のほとりとなる馭者溜り (cabman's shelter) という馭者や港湾労働者向けの小さな喫茶店である。この店の経営者は、アイルランドのイギリスからの独立を主張する無敵革命党 (the invincibles) の党员として、「フェ

ニックス・パーク殺人事件」に関与したとされるジェイムズ・フィッツハリス (James Fitzharris) であると噂されており、この挿話では、「山羊皮」(skin-the-goat)<sup>(1)</sup> という通称名で登場する。彼は、『オデュッセイア』の豚飼いえウマイオスに対応している。オデュッセウスの息子、テレマコス (Telemachus) に対応するのが、文学青年スティーヴン・ディーダラス (Stephen Dedalus) である。『オデュッセイア』で、父と子が再会したように、第16挿話では、ブルームとスティーヴンがお互いに理解できるようになるかどうかのポイントとなっている。

この挿話では、船乗りの法螺話を中心に、多様な作り話や虚言が次から次へと現れる。ブルームは、船乗りの法螺話を聞く傍らで「シャーロック・ホームズの推理」を続けていたことが、*“He had been meantime taking stock of the individual in front of him and Sherlockholmesing him up ever since he clapped eyes on him.”* (16.830-31)<sup>(2)</sup> と記されている。ブルームがホームズのように虚偽を前にしながら事実を探り出そうとするのは、この船乗りからだけではない。この挿話における多様な事柄について、ブルームは事実を探り出そうとする。その結果、この挿話では、歴史や社会の中に

潜んでいる虚偽、偽装、捏造、虚構が前景化されることになる。さらにブルームの活動を通して、我々は、事実（fact）とは何か、事実と認定される条件とは何なのか、という問題をも考えさせられることになるのである。

すでに多くの研究者や批評家がこの挿話が欺瞞に満ちたものであるという特徴を指摘している。例えば、マリリン・フレンチ（Marilyn French）は、次のように述べている。

The primary subject of Eumaeus is language as deception, and the episode is therefore the counterpart to Oxen of the Sun. As usual, the subject is incorporated on every level. Just as the style obscures what is “really” happening, conceals feeling, which has become equivalent to significance, the vague and circumambulatory journey of Stephen and Bloom obscures the actual outlines of the city. In addition, the events of the chapter are a series of deceptions, false leads, false clues, mistakes. (214, 下線は筆者による)

とは言え、従来の研究は、虚偽の代表例をいくつかつか取り上げるに留まっている場合が多く、この挿話における虚偽や欺瞞の問題を正面から論じた研究はあまりないように思われる。本稿では、『ユリシーズ』第16挿話のテキストに現れる虚偽や欺瞞を体系的に捉え、その対極にある事実へのこだわりを対置しながら、本挿話の意義の一端を明らかにしたい。

## 2. 登場人物をめぐる虚偽と捏造の実態

本挿話における虚偽と捏造のうち、まず登場人物の台詞に見られるもの、および登場人物の描写に見られるものについて検討してみたい。

第15挿話の舞台となる娼館をあとにして夜のダブリンの街をうろつくスティーヴンとブルームに、最初に声をかけるのがジョン・コーリー（John Corley）という男である。語り手は、この男の血筋について詳細な説明を付けている。

Lord John Corley some called him and his genealogy came about in this wise. He was the eldest son of inspector Corley of the G division, lately deceased, who had married a certain Katherine Brophy, the daughter of a Louth farmer. His grandfather Patrick Michael Corley of New Ross had married the widow of a publican there whose maiden name had been Katherine (also) Talbot. Rumour had it (though not proved) that she descended from the house of the lords Talbot de Malahide in whose mansion, really an unquestionably fine residence of its kind and well worth seeing, her mother or aunt or some relative, a woman, as the tale went, of extreme beauty, had enjoyed the distinction of being in service in the washkitchen. This therefore was the reason why the still comparatively young though dissolute man who now addressed Stephen was spoken of by some with facetious proclivities as Lord John Corley. (16.130-43, 下線は筆者による)

引用に下線を付けたように、語り手は、コーリーが名門の血を引いていることについて、「噂」（rumour, tale）という語を出しながら説明している。「根も葉もない噂」という言い回しがあるが、噂について「火のないところに煙は立たぬ」と言うこともある。噂とは、事実なのか虚偽なのか不明のまま世間に流布している話のことである。この挿話は、噂話

にはじまって、一貫して事実と虚偽をめぐる問題を取り扱うことになる。

コーリーは、自分が失業中で今夜泊まる場所がないことをスティーヴンに訴えるが、これについても語り手は、完全な“*fabrication*” (16.153), すなわち「作り話」であるかもしれないこと、そして彼の愚痴話は, “on a par with the others was hardly deserving of much credence” (16. 174-75), すなわち「例によってほとんどが出鱈目である」ことがスティーヴンにはわかっていると説明をつけている。にもかかわらず、スティーヴンは、コーリーにポケットの中にあった銀貨を彼に貸し与えてしまう。このことに気がついたブルームは、探偵のように冷静にコーリーの人柄を推理する。

Being a levelheaded individual who could give points to not a few in point of shrewd observation he also remarked on his very dilapidated hat and slouchy wearing apparel generally testifying to a chronic impecuniosity. Palpably he was one of his hangerson . . . . (16.218-22)

ここでブルームは、自分の耳に入ってくる話について、「作り話」、「虚偽」ではないかと疑念を抱き、「事実」を解明しようとする。以後彼はこの挿話で同様の「探偵的活動」を繰り返していく。

ブルームは、飲料をしきりに要求するスティーヴンを近くの馭者溜りに連れて行く。彼は、この喫茶店の主人であるフィッツハリス（「山羊皮」）の素性について, “Fitzharris, the invincible, though he could not vouch for the actual facts” (16. 324) と、ほんとうのところ事実かどうかはわからないとスティーヴンに囁いている。さらにあとで、語り手によって

“the licensee of the place rumoured to be or have been Fitzharris, the famous invincible, and the other, obviously bogus . . .” (16. 1043-45) と説明されているように、この店の主人が無敵革命党員の「山羊皮」であるということも「噂」にすぎない。このため、「山羊皮」については, “Skin-the-Goat, *alias* the keeper” (16.596) と “*alias*” が付けられることもある。ここでの “*alias*” は「別名」の意味ではあるものの、「偽名」という意味で用いられることもあり、正体の怪しさが暗示されている。

馭者溜りにいる「もうひとりの明らかに偽りの人物」 (“the other, obviously bogus”) とされているのが、「自称船乗り」 (“*soi-disant sailor*,”<sup>(3)</sup> 16.620) である。この船乗りは、ブルームやスティーヴンをはじめ、馭者溜りにたむろする「寄せ集めの人々」 (“*miscellaneous collection*,” 16.327) を前に、世界中を航海してきた冒険譚を得意げに語っていく。

自らをW.B.マーフィー (Murphy) と名乗るこの船乗りは、中国や南北アメリカを含めた地球上のあらゆる場所へと航海したと豪語する。

I've circumnavigated a bit since I first joined on. I was in the Red Sea. I was in China and North America and South America. We was chased by pirates one voyage. I seen icebergs plenty, growlers. I was in Stockholm and the Black Sea, the Dardanelles under Captain Dalton, the best bloody man that ever scuttled a ship. I seen Russia. *Gospodi pomilyou*. That's how the Russians prays. (16. 458-63)

さらに人食い人種を見たと言って、友人がくれたという絵葉書を一同に見せる。その絵葉書の光景は、原始的な小屋の前にいる「野蛮人」の女性の一群と子どもたちの様子で

あった。これについてブルームはさっそく「探偵的活動」を開始し、船乗りの話の真偽を探りはじめ、絵葉書の宛名が架空のもの（“the fictitious addressee,” 16.497）であり、船乗りの名前とも一致してないことに気づき、この人物の話の信憑性をさらに疑う（“made him nourish some suspicions of our friend's *bona fides*,” 16.498）ようになるのである。船乗りは、聴衆一同の半信半疑の表情（“an expression of dubiousity,” 16.574）をものともせずさらに話を続けていく。

船乗りは、ブルームの「ジブラルタルの岩山を見たことがあるか」（“Have you seen the rock of Gibraltar?” 16.611）という問いかけに対して、「岩礁にはあきてしまった」（“I'm tired of all them rocks in the sea,” 16.622）とはぐらかしてしまう。地中海の出口に位置するジブラルタルは、世界中を航海する者ならば見ていて当然の場所であるが、船乗りの返事は明快なものではない。

船乗りの話が続いていく中で、ブルームはスティーヴンに彼の話が真正なものかどうか問いかけている。

Mr Bloom *apropos* of knives remarked to his *confidante sotto voce*. Do you think they are genuine? He could spin those yarns for hours on end all night long and lie like old boots. Look at him. (16.821-24)

テキストでは、このあとにブルームの心中とも語り手の解説ともとれるようなコメントが続く。ここで、ブルームの船乗りの話に対する疑念に変化が生じていることがわかる。

Yet still though his eyes were thick with sleep and sea air life was full of a host of things and coincidences of a terrible nature

and it was quite within the bounds of possibility that it was not an entire fabrication though at first blush there was not much inherent probability in all the spoof he got off his chest being strictly accurate gospel. (16.825-29)

さらにそのあと、ブルームは、スティーヴンに“Mind you, I'm not saying that it's all a pure invention . . .” (16.848) と述べて、「すべてが作り話というわけではない」という判断を示している。そして、“there was nothing intrinsically incompatible about it” (16.864-65) と述べ、この水夫の話には本質的な矛盾はなかったと判定している。

しかし、語り手の判断はブルームの判定とは異なっており、テキストの少し先で、次のように解説している。すでに引用した箇所を含めて以下に掲げておきたい。

the licensee of the place rumoured to be or have been Fitzharris, the famous invincible, and the other, obviously bogus, reminded him forcibly as being on all fours with the confidence trick, supposing, that is, it was prearranged as the lookeron, a student of the human soul if anything, the others seeing least of the game. And as for the lessee or keeper, who probably wasn't the other person at all . . . (16.1043-48, 下線は筆者による)

この引用で語り手は、船乗りは偽者（*bogus*）であると言い、店の主人も噂されているような無敵革命党員のフィッツハリス（すなわち「山羊皮」）ではおそくなさそうだと述べている。

以上のような船乗りに関する部分によって示されているのは、「真偽」の判定をするの

は誰かという問題である。ブルームが船乗りの話は「虚偽」ではないと考えるとそれは虚偽でなくなるのか、それともその判定は語り手のコメントに基づくべきものなのかという問題である。とはいえ第16挿話のテキストでは、船乗りや店の主人の正体について、偽者なのか本物なのかに関する問題提起だけがなされて、決定的な手がかりが示されることはない。そのため誰が「真偽」を決めるのかという問題も決着がつかないまま残ってしまうのである。

### 3. 一般的事象における虚偽

第16挿話の舞台は、馭者溜りという狭小な喫茶店である。しかしながら船乗りが語る世界周遊の話やそれに触発されたブルームの旅に関する思いによって、この挿話自体が地球規模の物語であるかのような印象をつくり出している。このことは、テキスト中に見られる“the whole world” (16.1107) や “make up a miniature cameo of the world we live in” (16.1224-25) という表現によっても強調されており、第16挿話はあたかも世界の縮図であるような様相を呈している。

この挿話では、虚偽の問題についても馭者溜りという舞台を越えて、さまざまな事象に見られるものが取り上げられている。具体的には、言語、新聞、キリスト教、歴史的事件に見られる虚偽や捏造である。<sup>(4)</sup>

テキストではまず言語に関わる虚偽が問題となる。馭者溜りに入る直前、スティーヴンとブルームはイタリア語が話されている現場を通りかかる。これを耳にしたブルームは、“A beautiful language” (16.345) と感想を述べる。これに対しイタリア語が理解できるスティーヴンは、「彼らは金のこと喧嘩をしているのです」 (“They were haggling over money,” 16.350) と言い、店に座ってから次のよ

うに述べる。

—Sounds are impostures, Stephen said after a pause of some little time, like names. Cicero, Podmore. Napoleon, Mr Goodbody. Jesus, Mr Doyle. Shakespeares were as common as Murphies. What's in a name? (16.362-64)

「言葉の音の響きは詐欺師」ではじまるスティーヴンのこの発言については、すでに数多くの研究者が解説しているが、ここでは特にブランズ (Gerald L. Bruns) のものを見ておきたい。

The idea that ‘Sounds are impostures’ adumbrates a basic nominalist formula, according to which a discontinuity is said to prevail between words and things. In the context here the discontinuity is between names and persons, and as the situation develops we are led to wonder, first, whether the keeper of the shelter is really the historical Fitzharris, and, second, whether Murphy is really the romantic figure he purports to be. We are led to suspect, in short, that no real relationship exists between character and role (just as, from the nominalist point of view, no natural relationship exists between things and name). (369-70)

ブランズによれば、スティーヴンの「言葉の音の響きは詐欺師」という発言は、言葉とそれが指し示すものとの乖離を表しており、さらに名前と人との乖離 (“What's in a name?” という『ロミオとジュリエット』の引用からも明らかである) も含意しているという。その結果、馭者溜りの店主は、ほんとうに「フェ



ニックス・パーク殺人事件」に關与したフィッツハリスなのかとか、マーフィーはほんとうにロマンティックな船乗りなのかという疑念が生じてくる。名前とそれが指すものとの間に実質的な關係がないことから、人物とその人物の役割との間の關係も私たちは疑うようになるのだ。

ブランズの解説に付け加えると、コーリーや船乗りの発言が虚偽であるとすれば、彼らは現実には存在していないことを話していることになる。こうしたことが可能になるのは、言語の本質が記号表現 (significant) と記号内容 (signifié) の恣意的關係という特性に基づく以上、人間は、話す内容が現実に存在しているか否かということとは無關係に、自由に言語を用いることができるためなのである。その結果、人間は、言語を用いて必ずしも現実に存在しないことを自由に作り出せるようになった。この挿話で問題になる「嘘」や「虚偽」、「虚構」は、それが指し示す事実の存在なしに、言葉だけで組み立てられているものである。さらに言うところ「fiction」と呼ばれる「小説」も同様に言葉によって組み立てられた「虚構」なのである。

人物名とそれが指す人物の關係に話を戻すと、ステイーヴンの発言のあとで、船乗りがステイーヴンの父親サイモン・ディーダラス (Simon Dedalus) と同姓同名の別人の銃の名人の話をする。これはまさに名前が同じでも指す人物が異なっているという好例であり、「音の響きが詐欺師」になりうる実例である。

この挿話では、新聞も嘘を述べるものとして取り上げられている。その実例が“The pink edition extra sporting of the *Telegraph* tell a graphic lie lay” (16.1232) というくだりに出てくる『テレグラフ』誌である。ブルームは、この日の午前中に参列した友人の葬儀の記事の中に自分の名前が誤植 (graphic error) に

よって“*L. Boom*” (12.1260) とされていることに気がつく。「サイモン・ディーダラス」という同じ名前が異なった人物を指していたのに対し、今度は同一の人物が異なった名前で現れている。このことからまさに「名前には何の意味があるのか?」ということを考えずにはいられない。さらにここに出てくるサイモンがステイーヴンの実父であり、ブルームが象徴的な父親役であることも意味深長で、ステイーヴンにとって父親とは何なのかという問題にもつながっていく。

ブルームはステイーヴンとの会話の中で神の存在も捏造だとして問題にしている。ブルームのこのような思想は『ユリシーズ』全体の中で見られるが、特にこの挿話の次の引用で、彼は自分の見解を明確に口に出している。

but it's a horse of quite another colour to say you believe in the existence of a supernatural God.

—O that, Stephen expostulated, has been proved conclusively by several of the best known passages in Holy Writ, apart from circumstantial evidence.

On this knotty point however the views of the pair, poles apart as they were both in schooling and everything else with the marked difference in their respective ages, clashed.

—Has been? the more experienced of the two objected, sticking to his original point with a smile of unbelief. I'm not so sure about that. That's a matter for everyman's opinion and, without dragging in the sectarian side of the business, I beg to differ with you *in toto* there. My belief is, to tell you the candid truth, that those bits were genuine forgeries all of them put in by monks most probably or it's the big

question of our national poet over again, who precisely wrote them like *Hamlet* and Bacon, as, you who know your Shakespeare infinitely better than I, of course I needn't tell you. (16. 770-84, 下線は筆者による)

ブルームはすでにこの日の午前中に市内の教会に立ち寄った際にミサの場面を見ながら、「教会の神学は昔の教会の博士がつくったものなのだ」(“Liberty and exaltation of our holy mother the church. The doctors of the church: they mapped out the whole theology of it.” 5.439-41) と呟いていた。彼はスティーヴンを前にさらに踏み込んで超自然的な神の存在は僧侶によってつくられた捏造 (forgeries) だと述べているのである。

馭者溜りでは、アイルランドの政治家パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-91) についても居合わせた一同の間で話題となる。それは馭者の一人がいつか “*Return of Parnell*” (16.1298) と書かれた新聞の見出しを目にする日がきつと来ると述べたことにはじまる。この話題は、馭者溜りでの会話とブルームの思ひの中で展開していくが、やはり「噂」や「偽名」などの怪しげな内容が含まれている。馭者はパーネルが失脚後に南アフリカに逃亡してボーア人の将軍になったという生存説を主張している。(ただしこれについてブルームは「まんざらあり得ないことではない」と考えている。) ブルームは “several aliases such as Fox and Stewart” (16.1322-23) とパーネルが用いた “Fox” や “Stewart” のような “alias” (偽名, 変名) のことも思い出している。これらの偽りの名は、パーネルが不倫相手のイギリス大尉夫人キティー・オシー (Kitty O'Shea) との連絡に用いたものであった。

ここではさらに「噂」が勘違いから生じること示されている。ブルームとスティー

ヴンの次の会話を見てみよう。

And, if I don't greatly mistake she was Spanish too.

–The king of Spain's daughter, Stephen answered, adding something or other rather muddled about farewell and adieu to you Spanish onions and the first land called the Deadman and from Ramhead to Scilly was so and so many.

–Was she? Bloom ejaculated, surprised though not astonished by any means, I never heard that rumour before. Possible, especially there, it was as she lived there. So, Spain. (16.1412-20)

ブルームは、オシーがスペイン人だったことを述べると、スティーヴンは「スペイン王の娘」と口にする。ただしスティーヴンが口にしたのは伝承童謡の「スペイン王の娘」を茶化しただけのことなのである。ブルームはこれを真に受けて「はじめて聞いた噂だが、あり得ることだ」と反応している。これはまさに事実無根の噂がいかんして生まれるかという一例を示していることになる。

#### 4. 「虚構と事実」の対比, 「虚偽と事実」の対比

これまで見てきたように、第16挿話は虚構と事実が複雑に交錯し、『ユリシーズ』の中でも非常に読みにくい箇所となっている。この挿話を少しでも理解しやすくするために、次の二つの観点からこの挿話に見られる対比を明確にしておきたい。一つめはこの挿話における歴史的事実 (fact) と虚構世界 (fiction, すなわち作品) の対比である。そしてもう一つは虚偽と事実の対比である。

まず歴史的事実と虚構世界の対比に着目す

ると、この挿話で記述されている内容は、次の4つに分けて考えることができる。すなわち、①歴史的事実、②歴史の中に作られた虚偽・虚構、③虚構作品（『ユリシーズ』）の中の事実、④虚構作品内の虚偽、である。①の代表例はフェニックス・パーク殺人事件が1882年に実際に起こったことである。②の例としては前述のようにパーネルがオシーとの連絡のために偽名を使ったことがあげられよう。③では、『ユリシーズ』の登場人物であるブルームとステイヴンが馭者溜りに入っただけでなく、この挿話における事実である。④の作品内の虚偽の例は、コーリーがステイヴンにお金を無心する理由や船乗りの法螺話などこの挿話に多数あることは、これまで見てきたとおりである。

『ユリシーズ』では、上記の①～④のレベルが整然と区別されているわけではない。アイルランド史と虚構が複雑に交錯することもある。例えば、ジョイムズ・フィッツハリス（すなわち「山羊皮」）自身は歴史的に存在した人物であるが、彼が馭者溜りの店主であるかもしれないことはジョイスの創作である。

第16挿話では、パーネルのシルクハットをブルームが拾ってパーネルに渡した場面が語り手によって2回描写されている。ここでも歴史と虚構が交錯する。

He saw him once on the auspicious occasion when they broke up the type in the *Insuppressible* or was it *United Ireland*, a privilege he keenly appreciated, and, in point of fact, handed him his silk hat when it was knocked off and he said *Thank you*, excited as he undoubtedly was under his frigid exterior notwithstanding the little misadventure mentioned between the cup and the lip: what's bred in the bone. (16.1333-39, 下線

は筆者による)

His hat (Parnell's) a silk one was inadvertently knocked off and, as a matter of strict history, Bloom was the man who picked it up in the crush after witnessing the occurrence meaning to return it to him (and return it to him he did with the utmost celerity) who panting and hatless and whose thoughts were miles away from his hat at the time all the same being a gentleman born with a stake in the country he, as a matter of fact, having gone into it more for the kudos of the thing than anything else, what's bred in the bone instilled into him in infancy at his mother's knee in the shape of knowing what good form was came out at once because he turned round to the donor and thanked him with perfect *aplomb*, saying: *Thank you, sir*, though in a very different tone of voice from the ornament of the legal profession . . .

(16.1513-24, 下線は筆者による)

歴史上の人物であるパーネルに虚構上の人物のブルームが帽子を拾って渡すという同じ場面を描写している2つの引用では、ブルームが登場する時点ですでに「虚構」であるにもかかわらずこの場面が「事実」であるということ強調するために“in point of fact”，および“as a matter of fact”（どちらも「実のところ」）や“as a matter of strict history”（「正確な歴史的事実として」）という表現が挿入されていることには注目しておくべきであろう。

これまで見てきたように、第16挿話では、実に多様な虚偽と捏造が現れていた。故意に作られた虚偽もあれば、新聞の誤植のようにミスによるものもあった。また個人がつくり出すものもある一方で集团的に作られるもの



もあった。これらを表すためにテキストでは名詞の“bogus”, “fabrication”, “invention”, “lie”, “rumor”, “spoof”, “yarns”や形容詞の“fictitious”など「虚偽」と「捏造」に関わる語が繰り返し用いられていた。さらに登場人物を示す語句にも“alias”, “pseudo” (16.1070), “soi-disant”など「偽名」や「自称」を示す語が添えられていた。これとは逆に「事実」を示す“fact”と“facts”もこの挿話では34回 (“fact”は31回, “facts”は3回)も現れている。<sup>(5)</sup>この回数は『ユリシーズ』の中でも際立って多く、この挿話が「虚偽」と「事実」の対比をめぐる挿話であることを如実に示している。

この挿話における“fact(s)”の用法には次の3つの特徴が見られる。まず第1にこの語が現れるのは、語り手自身の語りまたはブルームの台詞や心の中の描写に限られていることで、船乗りなど他の登場人物の台詞に現れることはない。第2に, “in fact”, “in point of fact”, “as a matter of fact”のように「実のところ」を表す熟語が大多数を占めているということである。この理由の一つは、語り手やブルームが、虚偽がはびこるこの挿話の中で「少なくとも自分は事実を語っている」ことを主張するためであると思われる。第3に, “fact(s)”という語を用いて, 「事実」とは何かを読者に考えさせるような例が少数ではあるが見受けられるということである。これについては、いくつかの例を見ながら検討することに値する。

「事実」とは、まず第1に「誰の目から見ても明らかなこと」である。これはブルームの心の中に現れる海への思いの中に, “the eloquent fact remained that the sea was there in all its glory...” (16.638-39) と示されている。第2に, 「事実」とは「全員が一致してそのように認めること」によって形成される。馭

者溜りでは、アイルランドの富がイングランドに吸い取られていることについて、一同の意見が一致し, “all agreed that that was a fact” (16.994-95) とテキストに示されている。第3は、裁判等における「宣誓」によって「事実」がつくられることである。このことは、パーネルとオシー夫人との関係について目撃者が証言台で宣誓の上、暴露したという例によって示されている。すなわち, “the fact, namely, that he had shared her bedroom which came out in the witnessbox on oath when a thrill went through the packed court literally electrifying everybody in the shape of witnesses swearing to having witnessed him on such and such a particular date in the act of scrambling out of an upstairs apartment...” (16.1372-76) の場面である。第4に、歴史的に見て長い間、人々がそのように考えていることも「事実」とされている。ブルームは、第12挿話でアイルランド愛国者と酒場で口論になり、ユダヤ系であることを中傷される。そこで彼は「キリストもユダヤ人だった」と反論したのであった。馭者溜りで、ブルームはこの場面を思い出してスティーヴンに“facts”を用いて, “So I without deviating from plain facts in the least told him his God, I mean Christ, was a jew too and all his family like me though in reality I'm not.” (16.1083-85) と述べている。

以上の4つの例は, 「事実とは何か」という問いに手がかりを与えてくれるものではあるが、同時に「事実」の定義がいかに不安定なものであるかも示している。「全員の一致」や「宣誓」は人間の意思に委ねられた人為的なものであり、これらで「事実」と認定できるのであろうか。またブルームは「キリストがユダヤ人であることは事実」と述べていたがその一方で、神の存在については「捏造」と述べている。神の子とされるキリストの

存在は、彼にとって「事実」なのか「捏造」なのかは不明瞭なままである。

## 5. 結論

『広辞苑』（第六版）では「事実」の②として次のように説明している。

〔哲〕(factum (ラテン)・fact (イギリス))  
本来、神によってなされたことを意味し、時間・空間内に見出される実在的な出来事または存在。実在的なものであるから幻想・虚構・可能性と対立し、すでに在るものとして当為的なものと対立し、個体的・経験的なものであるから論理的必然性はなく、その反対を考えても矛盾しない。

『広辞苑』が説明しているように「事実」(factum, fact)とは、西洋社会において「本来、神によってなされたことを意味」することであったとすれば、このことが『ユリシーズ』第16挿話において、「虚偽」と「事実」がこれほどまでに問題となることの一因だと考えられる。『ユリシーズ』の世界において、神の存在自体が「捏造」だとされたとき、何が「事実」となるかという根拠がなくなってしまう。事実とは海の存在のように「誰の目から見ても明らかなこと」に限られてしまうことになる。

「事実」の定義が不明瞭になると、その対極にある「虚偽」も不明瞭なものになってしまう。第16挿話では、船乗りの話など「虚偽」の可能性があることについて、「虚偽」であること自体が「事実」として確定されることはなかった。これは、「事実」とは何かの定義自体がきわめて難しいからである。

『オデュッセイア』において豚飼イエウマイオスの家で父と子は再会し、親子関係を取

り戻し、ペネロペイアのもとへ向かう。ジョイスの『ユリシーズ』で、ブルームは、人生における注意を与えるなどステイーヴンに対してあたかも父親であるかのように振る舞おうとしていた。馭者溜りを出た二人は馬車に乗って妻モリー (Molly) がいるブルームの家へと向かう。この挿話のテキストには、ステイーヴンのブルームに対するこの時の気持ちが描かれてはいない。そのため推測の域を出ないが、ステイーヴンがブルームを父親のように思うかと言えば、それは難しいと言わざるをえない。ステイーヴンは、もともと父性というものに懐疑的であり、第9挿話で“fiction”を用いて、“Paternity may be a legal fiction. Who is the father of any son that any son should love him or he any son?” (9.844-45) と述べ、父性とは「虚偽、虚構」であり父の息子に対する思いをはじめるから信じてはいない考えを露わにしていたからである。この挿話では、ステイーヴンの実父サイモン・ディードラスと同姓同名の別人物が話題にされたり、象徴上の父親のブルームの名前が新聞記事で誤植されていたが、こうしたことは、父親が「虚偽」または「虚構」の存在であるというステイーヴンの主張とあたかも呼応しているかのようである。

以上見てきたように、第16挿話では“fictitious”, “fabrication”, “forgeries”など「虚偽・捏造」と“fact”で示される「事実」とを対比しながら、「虚偽・捏造」なのか「事実」なのかを判定することの困難さが示されてきた。「事実」と似た言葉に「現実」(reality)と「真実」(truth)がある。また“fiction”には「虚偽」と「虚構」の両方の意味がある。この挿話では確かに「虚偽・捏造」と「事実」は対立概念として提示されていたが、「虚構」という意味での“fiction”と「真実」は対立してはいない。「真実」とは、「事実」の延

長線上にあるものではなく、「事実」と「虚構」の対立を越えたその向こう側で探すべきものなのであろう。歴史上の人物のパネルの帽子を虚構上の人物のブルームが拾って渡す場面は、『ユリシーズ』における「事実」と「虚構」の超越を象徴している。ジョイスの分身たるレオポルド・ブルームとステイーヴン・ディーダラスの一日の旅は、「真実」を求める旅なのである。

## 注

- (1) 「山羊皮」という語は、ホメロスの『オデュッセイア』第14巻に現れている。豚飼いエウマイオスは大きくて分厚い山羊の皮を座布団として敷いて、オデュッセウスをもてなしたのであった。また、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の『ロビンソン・クルーソー』 (*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1719) にも「山羊皮」が関係している。『ロビンソン・クルーソー』に題材を提供した船乗りアレグザンダー・セルカーク (Alexander Selkirk, 1676-1721) の無人島漂着の実話には、セルカークが山羊皮服を着用して生活していたことが記載されている。そしてロビンソン自身も無人島で自ら作った山羊皮の衣類を愛用していた。『ユリシーズ』では第6挿話で『ロビンソン・クルーソー』への言及がなされているが、第16挿話においても間接的ながら複数の関連性が見受けられる。詳細については稿をあらためて論じることにした。(セルカークについては、渡邊孔二氏による論考を参考にした。)
- (2) 『ユリシーズ』のテキストには、James Joyce, *Ulysses* (New York: Random House, 1986) を用い、括弧内にこのテキストからの引用の挿話番号と行番号を示した。
- (3) 「自称」を表す “*soi-disant*” という語は、この挿話の “the *soi-disant* townclerk Henry Campbell” (16. 1354-55) でもう一度用いられている。馭者溜りに登場する人物は身元が怪しい人物ばかりである。
- (4) 事実を正しく伝えない媒体の例として、この挿話では写真も取り上げられている。例えばブルームはモリーが写った写真に関する “her

stage presence being, frankly, a treat in itself which the camera could not at all do justice to” (16.1459-60) という思いの中で、彼女の舞台上の姿はカメラでは正しくは表せないという考えを示している。

- (5) “fact” および “facts” が第16挿話に現れる回数については、Wolfhard Steppe, *A Handlist to James Joyce's Ulysses: A Complete Alphabetical Index to the Critical Reading Text* を参照した。なお同様の指摘がすでにマーガレット・マックブライドによってなされている。Margaret McBride, *Ulysses and the Metamorphosis of Stephen Dedalus*, 104を参照。

## 引用・参考文献

- Bruns, Gerald L. “Eumaeus.” *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*. Ed. Clive Hart and David Hayman. Berkley: U of California P, 1974. 363-83.
- Fairhall, James. *James Joyce and the Question of History*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- French, Marilyn. *The Book as World: James Joyce's Ulysses*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1976.
- Gifford, Don, and Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. 2nd ed. Berkeley: U of California P, 1988.
- Joyce, James. *Ulysses*. New York, Random House, 1986.
- McBride, Margaret. *Ulysses and the Metamorphosis of Stephen Dedalus*. Lewisburg: Bucknell UP, 2001.
- Steppe, Wolfhard, and Hans Walter Gabler. *A Handlist to James Joyce's Ulysses: A Complete Alphabetical Index to the Critical Reading Text*. New York: Garland, 1986.
- ハラルト・ヴァインリッヒ (井口省吾訳注) 『うその言語学』大修館書店, 1973.
- 結城英雄 『「ユリシーズ」の謎を歩く』集英社, 1999.
- 渡邊孔二 「ロビンソン・クルーソーの末裔たち——少年冒険小説の主人公たち」『英国文化の世紀 3 女王陛下の時代』松村昌家 (他) 編 研究社出版, 1996. 201-22.
- 「事実」『広辞苑』(第六版) 岩波書店, 2008.